

アレキサンダー

2005(平成17)年2月6日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・脚本＝オリバー・ストーン／出演＝コリン・ファレル／アンジェリーナ・ジョリー／アンソニー・ホプキンス／エリオット・コーワン／ヴァル・キルマー／ロザリオ・ドーンソン／ジャレッド・レト／ジョナサン・リース・マイヤーズ／クリストファー・プラマー／ゲイリー・ストレッチ／ジョン・キャバナン（松竹、日本ヘラルド映画配給／2004年アメリカ映画／173分）

……子供の時「英雄伝」で読んでアレキサンダー大王の物語は雄大でロマンあふれるもの。しかし、きちんとその歴史を勉強しなければ、この物語は容易に理解できないはず。ギリシャの神々の時代の伝説をふまえ、BC350年という時代の意味をまず考えてみよう。そしてロクな地図もない時代にギリシャ・ペルシャ・インドから東の海までの統一帝国と東西の民族融合を夢見たアレキサンダーの天才ぶりを学習しよう。ストーリー展開は少し平凡だが、製作費200億円をかけたスペクタクル場面の迫力は満点。去年の『トロイ(TROY)』に続くハリウッドの歴史大作を大いに楽しもう！

歴史のお勉強その1——ギリシャとトロイ

昨年ブラッド・ピットの主演で注目を集めた歴史的な大スペクタクル映画が『トロイ』(04年)。「トロイ戦争」や「トロイの木馬」という言葉は誰でも知っているだろうが、それは、いつ誰と誰が何を争った戦争なのかについてはほとんど知らないのが実情だろう。そこで参照してもらいたいのが、『トロイ』について書いた私の映画評論（『シネマルーム4』59頁参照）だが、このトロイ戦争は、BC13～12世紀に起こったこと。もっともこのトロイ戦争についての正式な文献は存在せず、その内容はBC 8世紀後半の吟遊詩人であるホメロスが語った『イリアス』と『オデュッセイア』の中で語られているものだ。そしてその物語の中に登場するアキレウス等の英雄はその後ギリシャの国中で長く語り継がれてきた

もの。

歴史のお勉強その2——ギリシャとマケドニア

マケドニア王国とは、ギリシャ人の一派であるマケドニア人がBC 7世紀頃ギリシャの北方の地に建てた国。そしてBC350年頃アレキサンダーの父フィリップ2世がギリシャを滅ぼしてバルカン半島随一の強国に育て上げたもの。なおこのマケドニアが滅んだ後、バルカン半島はローマ帝国が支配することになる。

もうひと工夫欲しい映画のつくり方

この映画は、200億円をかけた超大作であるにもかかわらず、アメリカで不評だったと報道された。それはきっと、そのつくり方に工夫がなく、オリバー・ストーン監督なりに理解した歴史上の事実をそのままスクリーン上に描き出しているだけになっているためだ。しかしそうはいつでも、私の視点ではこの作品の映画づくりの工夫は3つある。第1は、アレキサンダー亡き後、エジプトの王となっているプトレマイオスの回想録としてアレキサンダーの物語を登場させたこと。第2は、幼年期、少年期のアレキサンダーを、適宜回想シーンとして登場させ同時並行的に2つの物語を描くことによってスクリーンに変化をもたせたこと。そして第3は、アレキサンダーの母オリンピ阿斯（アンジェリーナ・ジョリー）をストーリーの節目節目に登場させ、彼女に語らせることによって、アレキサンダーの悩みを浮かびあがらせたことだ。アレキサンダーの人生を描き、その築きあげた帝国の意味を問うという映画ともなれば、200億円もかかるし、3時間という超大作になることは不可避かもしれない。しかし、そうだととしても、つくり方にはもう少し工夫が欲しかったのでは……？ オリバー・ストーン監督……？

歴史上の人物のお勉強その1——プトレマイオス

エジプトのプトレマイオス王朝といえば有名なもの。絶世の美女クレオパトラの登場は、マケドニア滅亡後のローマ帝国のシーザーの時代であり、それはBC 1世紀のこと。中学生のころ、シ（し）ーザーが死（し）んだ（= BC44年）と語呂合わせで覚えさせられたことは今でもよく覚えている。また、エリザベス・

テイラー（クレオパトラ）とレックス・ハリソン（シーザー）そしてリチャード・バートン（アントニー）が共演した映画『クレオパトラ』（63年）を観れば、プトレマイオス王朝の状況やクレオパトラのおかれた状況もよく理解できる。

この映画には、2人のプトレマイオスが登場する。1人は、青年期のプトレマイオス（エリオット・コーワン）で、アレキサンダーの友人にして信頼する将軍の1人。そしてもう1人は、アレキサンダーの死亡後、内紛によって分割された帝国のうち、エジプトを支配し、回想録としてこの映画の物語の進行役を務めるプトレマイオス（アンソニー・ホプキンス）。プトレマイオスの名前くらいは知っておかなければ、この映画を理解することは到底ムリ……。

歴史上の人物のお勉強その2 —— アリストテレス

戦後すぐに発表された、石坂洋次郎原作の青春小説『青い山脈』は、古くは原節子（49年）や雪村いづみ（57年）の主演によって、私の世代では吉永小百合の主演（63年）によって映画化された。そこでの有名な「お話」は、「恋しい恋しい新子様」と書くべきラブレターを「変しい変しい」と書いたことによるドタバタ……？ その吉永版『青い山脈』に登場する「ガンちゃん」は変わったキャラの持ち主（高橋英樹がコミカルに演じていた）で、ギリシャ時代の哲学者の言葉を語るのが大スキな人間！ ソクラテス曰く「……」、プラトン曰く「……」、そしてアリストテレス曰く「……」とやっていた。そう、アリストテレスとはギリシャ時代の代表的な哲学者なのだ。『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）でトラップ大佐を演じた名優クリストファー・プラマー扮するアリストテレスが、この映画ではアレキサンダーたちの先生（家庭教師）として登場する。これが歴史上の事実かどうか私は知らなかったが、この評論を書くための資料を集める中ではじめてそれが真実だったと知った。やっぱりきちんと勉強しなければ……。

アリストテレスがアレキサンダーに与えた影響

映画からみる限り、アリストテレスはアレキサンダーの良き先生。しかし、アレキサンダーがああ当時誰も思いもつかなかったような東の海への進出とか、「東西融合」などということを実際に考えたのは、このアリストテレス先生の影

響大なるところがありそう。すなわち、アリストテレスは、ろくな世界地図もないし、自分の目でペルシャの都バビロンを見たことがないにもかかわらず、東に進み、ペルシャを征服し、さらに東へ進めば海に出ることができ、また南に下ればインドに入ることができ、そこからまた海路でギリシャに戻ってくることができるとアレキサンダーたちに教えたわけだ。もちろん、それはハツタリではなく、当時のギリシャの文化水準の高さを示すもので、おおむね正しいわけだが、BC350年という時代に、そんな夢みたいな話を信じ、実現しようとしたのがこのアレキサンダーという青年だったわけだ。

秦の始皇帝がはじめて中国を統一したのがBC220年だが、これは対立する斉・韓・魏・趙・燕・楚という他の六国の存在を確認したうえで、このターゲットを征服すれば中国を統一できるという全体像が見えていたもの。アレキサンダーと同じような規模での帝国建設と民族融和を構想した人物としては、ずっと後のAD11～12世紀のモンゴル時代におけるジンギスカンしかいないだろう。ジンギスカンは、東はまさに海を越えて日本まで進出しようとし、西ははるかヨーロッパまでその版図を広げ、かつ民族融和策を実現しようとしたわけだ。それに比べれば、18世紀におけるナポレオンのイタリアへの山越え侵攻や、ロシア遠征などはタカが知れたもの……。

スペクタクルその1——ガウガメラの戦い

この映画の製作費に200億円もかかったのは、2つの大スペクタクル場面の撮影のため……？ 前半のハイライトはBC331年のガウガメラの戦い。これは4万のマケドニア軍がダレイオス王率いる25万のペルシャ軍に挑んだものだが、ゲリラ戦ならいざ知らず、大平原に双方が布陣したうえでの真正面からの戦いでは、これだけ圧倒的な兵力差があれば勝敗の行方は明らかなはず。源義経が少ない兵力で平家の大軍を次々と打ち破ったのは、天才的な軍事戦略をもち、臨機応変の戦術を編み出したためだ。また織田信長が桶狭間で今川義元を打ち破ったのも、奇襲戦法のおかげ。アレキサンダーがこのガウガメラの戦いにおいて側近たちに指示する戦術（戦法）はそれなりに工夫したものだが、所詮ちよつとした工夫（？）にすぎないもの。こんな戦法によって勝てたのは不思議だが、要は私がい

つも言うように、「ケンカは気合いの持ち方ひとつ」ということ。すなわち、アレキサンダーが自ら先頭に立ってダレイオス王の本陣めがけて突進してきたため、その迫力に負けてダレイオス王が逃げ出したことがすべてのポイントだ。それがすべてであり、「ケンカの気持」の強さの差によってガウガメラの戦いの勝敗が決したわけだ。それにしてもこの戦いのスクリーン上における迫力はさすが。見ごたえ十分。是非お楽しみを……。

スペクタクルその2——インド象との戦い

後半のハイライトはインド象に乗ったインド軍との戦い。これを撮影したのはタイの首都バンコクの北130キロメートルにあるプーカエ中央植物公園内にある森、サラブリとのこと。30頭の本物の象を中心とする戦いを描くのはそりゃ大変だったと思うが、これも見ごたえのある戦闘シーンに仕上がっている。とりわけ、象の上にまたがるインド王に向かってアレキサンダーが愛馬ブーケファラスにまたがって駆けていき、一騎討ち(?)を迫るシーンの迫力と美しさは抜群！ 巨大な象に対して、後ろ立ちになって向かいあうブーケファラスとその上にまたがったアレキサンダーの姿は本当に美しいもの。もっともさすがのアレキサンダーもこの無謀な一騎討ちに成功することはできなかったが……？

この映画でもやっぱり女はコワイ！

この映画では、アレキサンダーの母親オリンピアスの存在とその影響が、アレキサンダーの人物像を描き出すについて大きなポイントとなっている。オリンピアスは、①アレキサンダーの幼児期、②アリストテレスのもとで勉強する少年時代、③フィリップ2世の後継者となる青年期、④フィリップ2世が別の女性に産ませた弟の誕生による王位継承をめぐる確執の時代、⑤そして、フィリップ2世が暗殺され、アレキサンダーが王位を継承し東方遠征に乗り出す時代において、コトあるごとにアレキサンダーにさまざまなアドバイスを与え知恵を吹き込むことによって大きな影響を与えている。

さらにこれは、アレキサンダーが東方遠征に旅立ってからと同じ。オリンピアスがアレキサンダーに対して手紙で訴えるアドバイスは、「側近を信用するな」

「ヘビはいつ裏切るかわからない」というもの。このオリンピアスに扮するアンジェリーナ・ジョリーは、いかにもピッタリの適役で迫力があるが、これを見てると、いつものとおり私の感想として「やっぱり女はコワイ！」と言わざるをえない。アレキサンダーも、こんな母親をもっていたのでは本当に大変だっただろう。もちろんその夫であったフィリップ2世も……。

すばらしきかな、バビロンの都！

BC350年当時のペルシャの都がバビロン。バビロンとはシュメール語で「神の門」という意味とのことだが、この映画で描かれるバビロンの都は誇り高きギリシャ人たちが度肝を抜かれるほどのきらびやかな大都市。スクリーン上にCGで描かれたその大都市ぶりは、現在のニューヨークの都市や上海、香港の都市を彷彿させるほどの大規模超高層建築物が建ち並ぶ、そりゃものすごいもの。ちなみに、旧約聖書で有名な、バビロニアの王様が天に届く塔を造ろうとし神の怒りに触れたという、「バベルの塔」もここバビロンにあったといわれている。さらに世界の七不思議に数えられる「バビロンの空中庭園」は、BC 7～6世紀頃ここに建造されたものといわれている。

バビロンの都とバグダッド

ペルシャの都バビロンがあったのは、現在のイラクのほぼ中央部、すなわち首都バグダッドから南へ約100キロメートルほどのところに位置しているらしい。したがってイラク戦争の後、日本の自衛隊が駐屯を続けているサマワは、このバビロンの都のすぐ近くということになる。21世紀の現在、アメリカ合衆国がサダム・フセインによるイラクの独裁政治を崩壊させるべく、遠く中東の地までその軍隊をさし向けたわけだが、BC350年当時は、現在のイタリアにあったギリシャ（マケドニア）がその役割を果たしたことになる。そしてギリシャからのその大遠征によって地中海を隔てた南にあるエジプトとチグリス・ユーフラテス川の南にあるバビロニアを従えたうえで、その東にあるペルシャとの一大決戦に勝利し、さらにその東へ、そして南のインドまで帝国の版図を拡げていったというのだから、その規模の大きさには驚くほかない。ペルシャのバビロンの都は現在のバグ

ダッドのすぐ近くと認識できれば、西のギリシャからインドの東までの全体的な地理や位置関係がある程度理解できるはずだ。

アレキサンダーの結婚相手は？

王国や帝国の支配者にとって、その結婚相手の女性を誰にするかは、事実上世継ぎを誰にするかを定めるもの。したがって、アレキサンダーの母のオリンピアスもアレキサンダーの多くの側近たちもみんな、その妻（正妻）はマケドニアの女性を選ぶものと確信していた。ところが、アレキサンダーが選んだ妻は、何とペルシャよりさらに東方にある、アレキサンダーが征服したアジアの国、バクトリア王国の王女のロクサネ（ロザリオ・ドーソン）だった。こんな「国際結婚」が祝福されるはずがないのは当然だが、これを決行したアレキサンダーをみれば、彼は本気で東西融和を考えていたことがよくわかる。

ここで思い出すのが、ジンギスカンの若き時代を描いた井上靖の小説、『蒼き狼』。すなわち弱小民族の子であったテムジンがわが妻ボルテをメルキト族に略奪される物語は悲しいものだが、そのテムジンが成長した後メルキト族のクランを第2夫人として迎え入れたというお話だ。こういう行動を見ているとやはり、英雄の考えることは普通とは違うということを痛感させられる。

アレキサンダーは議論がスキ……？

『始皇帝暗殺（The First Emperor）』（98年）を観ても、『項羽と劉邦——その愛と興亡完全版（上集「西楚霸王」下集「楚漢争覇」）』（94年）を観ても、あるいは日本の織田信長や豊臣秀吉らのドラマを観ても、トップに立つ者の役目は、議論すべきテーマを設定し、家臣たちに十分議論させたうえで最終決断を下すことであることがよくわかる。しかし、この映画ではそれが大きく違っている。つまりアレキサンダーは、マケドニアの王であり、東方遠征軍の総司令官であるにもかかわらず、再三部下の将軍から自分とは異なる意見をぶつけられることだ。そして不思議なことは、これに対してアレキサンダーが毎回ムキになって（？）反論していること。しかし、いくら反対意見があっても結局最終的意思決定はアレキサンダーがしているのだから、これらの議論をすることの意味は一体何なのだ

ろうと考えさせられてしまう。アレキサンダーが家臣の意見に従ったのは、インドでの戦いの最終局面の中でマケドニアに帰ろうと決めた時だけだが、これだって、その本当の動機は、自分自身が傷ついたため……？

多くの家臣たちが見守る中でアレキサンダーと堂々の議論を展開することは、民主主義国家ギリシャでは大切なことだろうが、どうもそのシステムが今一つ理解できない。アレキサンダーから約300年後のローマ帝国のシーザーの時代では、元老院という「民主主義の府（?）」が存在していたから、ディベートやアジ演説が重要となったことはよくわかるが、さてアレキサンダーの時代は本当はどんな実態だったのだろうか？ もっとも、戦場におけるアレキサンダーのアジ演説は超一流！ それだからこそ、ガウガメラの戦いでは、わずか4万の軍隊で25万のペルシャ軍を打ち破ることができたのだ。

同性愛ってホント……？

アレキサンダーにたくさんの側近の将軍たちがいるのは当然。その主なものはヘファイステイオン（ジャレッド・レト）やカッサンドロス（ジョナサン・リース・マイヤーズ）そしてクレイトス（ゲイリー・ストレッチ）。その特徴は、アレキサンダーが20歳代と若いだけに側近というよりは友人という感じが強いこと。この側近たちも7年間に及ぶ東方大遠征の中、戦死したり裏切りによって粛清されたりして次第に少なくなっていった。そんなたくさんの側近の中に1人ちょっと怪しげな雰囲気のある男がいる。それは、あたかも織田信長と森蘭丸との関係（男色）と同じような同性愛……？ ホンマかいな……？

毎日新聞（2005年1月27日付）によれば、「アレキサンダーを同性愛者として描いたため、米国の一部の都市では上映禁止になったという」と書かれていたから、私の理解はまちがいでないはず。パンフレットには、この点について、オリバー・ストーン監督の「古代ギリシアでは、男性の種はあらゆる創造の元であると考えられていた。女性の本当の役割というものを完全に無視してね」「女性は劣る者として扱われていた。極めて父権的な社会だったんだ」という解説がある。またアレキサンダーを演じたコリン・ファレル自身も、「知識や肉体を分かち合うということが、男たちにとって極めて純粋だという哲学があった」「エロ

ス、純愛、成長、知識の共有だね。そこには『同性愛』もなかった。とにかく避けられない性の交わりがあるだけだ。ヘファイステイオンはアレキサンダーの友人だったから」と解説(弁明)している。さて、その真相は……？

アレキサンダーの理想とアメリカ合衆国の理想そして大東亜共栄圏……

なぜ2005年の今、ハリウッドのオリバー・ストーン監督がアレキサンダーを主人公にした映画を作ったのか？ それについてはいろいろな説明がなされている。この映画を観た多くの観客は、アレキサンダーによるペルシャへの侵攻・征服と統治権の委譲、そして民族の融和という理想と、現在アメリカ合衆国が進めているアフガン戦争・イラク戦争によるかつてのペルシャ(イスラム教圏)への侵攻、そして民主主義的価値の浸透(強要)を重ねあわせてみるができるはずだ。昨年話題作であるマイケル・ムーア監督の『華氏911』(04年)は、徹底的にブッシュ大統領を批判し、これをこきおろすことによって、アメリカ合衆国のイラク政策・イラク戦争の是非を考えるネタを提供したが、それはやはり一面的なモノの見方を強調したものだだったと私は思っている。

それに比べれば、アレキサンダーが行動で示した当時の最高の文明国であるギリシャ(マケドニア)による、ペルシャ・バクトリア・インドへの東方大遠征は、単なる武力による侵略や略奪ではなく、征服した後の国家統治の権限の委譲と民族の融和を目指していることがよくわかるものすごく高次元のもの。しかし、2005年の今、アレキサンダーのこの東方大遠征をどのように評価し、そしてアメリカ合衆国による現在のアフガン・イラク戦争をどのように評価するかは難しいもの。その格好の勉強のネタをこの映画が提供してくれることはまちがいない。

また、目を転じて考えてみれば、このようなアレキサンダーの東方大遠征は、かつて大日本帝国と呼ばれていた日本が、中国東北地方の満州に進出するについて、「大東亜共栄圏」「五族協和」を唱えたのとまったく同じものではないだろうか。そして、結果的にこの構想は単なる中国への侵略戦争の「お題目」になってしまったとしても、少なくともその理想自体は誤っていなかったと考える人がいても不思議ではないと私は思うのだが……？

2005(平成17)年2月7日記